

## 『可笑記評判』考

— 『可笑記』に対する批評の視座 —

末 裕 昌 子

浅井了意作『可笑記評判』（十卷十冊、万治三年刊<sup>(注1)</sup>）は、如備子作の教訓的批判的な随筆集『可笑記』（五卷五冊、寛永十九年刊<sup>(注2)</sup>）に対する批評である。本書には、『可笑記』の本文が段落ごと<sup>(注3)</sup>に引用され、その一々に「評曰」として了意の思うところが述べられている。

『可笑記評判』についての評価には、次のようなものがある。ひとつは、『可笑記評判』は、批評という形をとってはいるが、実際は、政道や世の中に対する『可笑記』の批判精神を継承した作品である<sup>(注4)</sup>と松田修氏<sup>(注5)</sup>や常吉幸子氏<sup>(注6)</sup>による評価。もうひとつは、『可笑記評判』は、批評というよりも、『可笑記』の解説あるいは注釈のような作品であるとする深沢秋男氏<sup>(注7)</sup>や花田富二夫氏<sup>(注8)</sup>の評価である。これらの評価に共通するのは、『可笑記評判』は『可笑記』の

批評でありながら、必ずしも批判や評価を目的としたわけではないとすると<sup>(注9)</sup>である。特に松田氏や常吉氏の論では、了意作『浮世物語』（寛文初年頃刊）が『可笑記』の批判精神を受け継いだ証左として『可笑記評判』が取り上げられており、了意に批評の意思があったことを認めていない。しかし、はたして『可笑記評判』の性格は、『可笑記』を批判し評価したとは言い得ないものなのである<sup>(注10)</sup>か。そのような疑問を提示すべく、ここで『可笑記評判』の序文を取り上げたい。

寛永の頃、了意が、京に身を寄せていた時の話である。ある人が了意のもとを訪れて、『可笑記』を差し出し、仁政・修身・文武・明德・五倫を教えた書で、その教えに従えば、聖賢の道に近づくことができる<sup>(注11)</sup>と言った。そこで、その本を開いて見てみると、経国・修身のための道理が説かれてあり、さらに、誰を指すというわけもなく、上は大名から下は侍までが批判されていた。『可笑記』を

見た了意は、次のように思ったという。

① 是なることは是にして、非なることは非なる事共すくならず。此故に、今、愚意を提て、評をくはへ、判をなさんとす。

いかなれば、仁に君子と婦人の仁あり。政に一家と天下国郡の政あり。愛に妻子一僕と万民平等の愛あり。武に一夫の勇と三軍の帥にあたる勇と、その外、物ごと一概すべからず。すべて文武二道の表裏本末、みなその時代によるべきことはり、筆にまかせて褒貶すと云レル。

了意は、傍線部①で、『可笑記』の教訓と批判は必ずしも正しいものばかりではないため、自らの意見を以て、その是非を判断したと述べている。そして、その際、傍線部②にあるとおり、「すべて文武二道の表裏本末、みなその時代によるべきことはり」によって、『可笑記』の批評を行ったと語っている。傍線部②から、『可笑記』に対する是非の判断が、文武二道の用い方はその時代の状況に よるといふ道理に基づいてなされたことがわかる。

それでは、なぜ了意は、そのような道理を持ち出して『可笑記』の批評を行ったのであろうか。その問いを解く鍵は、『可笑記評判』巻一巻頭の中にある。了意は、巻一巻頭で、『可笑記』のことを「ひろく文武両道のおきてを仮名がきにして、よみやすくしりやすきやうに、ひろめをしへんと心ざしてつくれる書とおぼえたり」と述べている。『可笑記』の主題を「文武両道のおきて」を示

すことだと認識していたのである。了意が、『可笑記』の是非を「文武二道の表裏本末、みなその時代によるべきことはり」によって判断しようとしたのは、この主題を意識したことであつたのだ。『可笑記』批評の焦点は、時代によって異なる文武実践のあり方に当てられていると見て間違いないのである。

序文を読む限り、『可笑記評判』は、『可笑記』を相対的に捉え、積極的に批判をしようとした作品のように思われる。したがって、『可笑記評判』を『可笑記』の追随作・解説・注釈とする見解は、『可笑記評判』の側面を捉えた評価なのであつて、『可笑記』批評の实体は、いまだ解明されるに至っていないと言える。『可笑記評判』を正面から論じ、批評としての真価を問うためには、まず『可笑記』との意見の相違を吟味する必要があるだろう。そこで本稿では、了意独自の見識を見出す第一歩として、序文に示された『可笑記』批評の焦点に着目し、「文武」と「時代」という言葉を手がかりに考察を行う。そして、『可笑記評判』の論断の様相を見ていくことで、了意の思想の一端を明らかにできればと考える。

## 二

まず、『可笑記評判』の「時代」認識について見ていこう。『可笑記』巻一―一は、如備子が『可笑記』の執筆経緯を述べた段で、永祿己巳年に彗星が出現した際、当時の易博士が「我朝、文武の正

道、めつきやくすべきしるしの星也」と予言したという話を伝え聞き、王道が絶えて久しい今の世を憂えて「文字のあやまり、かなちがひをはらず、此愚書を綴て、余が世倅にあたへ、よみならは」そうとして『可笑記』を編んだとある。これに対して『可笑記評判』巻一―一は、永祿二年に彗星が出現した記録はないと指摘し、その上で次のような批評を行っている。

永祿以来、文武二道滅却したり共おぼえず、中ごろより王道をとろへて武家より世をおさむる事、又これ、永祿以前、頼朝の時よりの事なり。文武の二道めつきやくしては、何によつて、今天下は平らかにおさまりて、異国よりは手をもさす事のかなはざる。これ本朝の武威さかんなる故にあらずや。又、文道のすたれざる事、京田舎いかなるともがらまでも、分に応じて学問をせざるものなし。もし又、その実義なき故にこれをすたれたりといふならば、実義の事は、むかしも今も人によつてあるなしは侍べらん。家作り、衣裳、男女のわかちみだれざるは文なり。太刀かたな、鎧旗、その作法の違はざるは武なり。武士なればとて、おさまれる世にも鎧かぶとをとりあつかひ侍べらば、これ乱をまねくといふものなり。馬を花山の陽にはなつこそ、太平のしるしなるべけれ。

了意は傍線部①のように、今は太平の世であり、文武も盛んであるとして『可笑記』に反論している。そして、傍線部②で、太平の

世では、武士だからといっていたずらに武具を扱えば戦の火種になると述べ、治世下での武道のあり方を問うている。

ここで目を向けたいたのは、了意が「今天下は平らかにおさま」つていると認識している点である。このような時代観は、右の批評のほか、『可笑記評判』巻三―十八、巻十一―四十二においても見られるものである。

『可笑記評判』巻三―十八が批評した『可笑記』巻二十九は、大将となつて国郡を奪い取るには、天命に背く為政者によつて国民が疲弊している国郡をねらうのが上策だが、攻略の後に自らも天命に背いてその国郡を支配すれば、今度は自分が国郡を奪い取られる側になるため、注意するよう諫めた内容である。これに対して『可笑記評判』巻三―十八では、

此一段は、乱れたる世の事をいへり。天下一統して、太平におさまりたる当代の事にはあらざるなり。(中略)

されば、此書にかきける如く、不道にしてほろぼされ、ほろぼしたる人、また不道にして、国家のためには二の舞也けり。つゝに、いま、天下一統して、四海太平也。万民、淳和の風に帰し、諸人、徳沢のめぐみをあふぐ。今とても、諸国拜任の主、不道にして、安隠なる事あるべからず。

とあり、まずは『可笑記』の教訓が直接的には乱世における内容であることを確認した上で、その教訓が平和な当世にも通じることを

言い添えている。

また、『可笑記評判』巻十一・四十二の批評する『可笑記』巻五―八十五は、主君がそれぞれの分限に見合った恩賞を与え、情けをかけて諸侍を登用すれば、国には諸芸万能の人々が自ずと集まり、万民が豊かになり、国は末永く繁栄する、という話であるが、この話について『可笑記評判』巻十一・四十二は、次のような批評をしている。

今の世は、不仁邪道なりとて、身を山中にをきたる賢者ありとも聞及ばず。諸芸万能の達者、まねかずして城下にあつまり、天下太平にして世々長久なる事、目のまへなり。御代長久なるべき歟と書とめたる事、乱世の時のをしへに相似たり。いかゞ。

今の世はすでに天下太平なので、『可笑記』の教訓をそのまま受け入れることはできないとしている。このように、『可笑記評判』からは、『可笑記』の教訓の是非を今の世に適するかどうかで判断しようとする観点と、当世を天下太平と見なす意の明確な時代認識が看取されるのである。

今の時世を意識することは、とりもなおさず、乱世と治世とを峻別した文武の教訓に繋がっていく。『可笑記評判』は、時代を考慮しない『可笑記』の文武の教訓を是正し、平和な当世に適った文武のあり方を示そうとしたのではないか。そうであるならば、了意が

平和な世を意識している以上、『可笑記』との文武観での差異は、文道において顕著であるに違いない。『可笑記』と『可笑記評判』の文武観を比較するには、文道を軸に据えて考察することが有効であると見えよう。

### 三

では、『可笑記』と『可笑記評判』は、それぞれのようにならぬ文道を提えているのであろうか。『可笑記』巻三―二十七には次のようにある。

人はたゞ学文において身をくだき、本心の玉をみがくべき事、かんようなるべし。

「本心の玉」とは、人間ひとりひとりが持っている「工夫・思索・分別・才覚・利発・武篇・ちゑ」の源泉である（『可笑記』巻三―二十四）。『可笑記』は、この「本心の玉」を磨くために、学問をすることが大切だと言っているのである。<sup>註</sup>これに対する批評『可笑記評判』巻六―二も、

をよそ人となりや、正直にして学問なき人は愚痴にみゆ。心ざしまことある人の学問なきはかたづまりてみゆ。武勇をこのみて学問なきは乱をおこす。強みを出して敷敷なる者、学問なければ狂のごとしといへり。すべていづれの道よりみれども、学問なくばかたくなにしてをろかなる事おほかるべし。

と学問の必要性を語っており、『可笑記』に同調する批評を行っている。『可笑記』『可笑記評判』ともに、学問の貴さを説いていることがわかるであろう。

ところが、『可笑記』『可笑記評判』を通読すると、両書が、万人に対して無条件に学問を奨励しているわけではないことに気づかされる。『可笑記』卷三十三は、所謂へ過ぎたるは及ばざるがごとしを主題とする教訓で、侍が手跡・馬・詩歌・鷹狩りといった芸能や学問を好み過ぎることに警鐘を鳴らしたものである。以下は、学問の条の抜粋である。

それ、学文と申ものは、人間において極無上の物にて候へ共、それさへもあまりに侍がすぎこのみ候へば、第一不奉公になり、又は、武士道もちにかたのやうに思ひなさるゝ。げにトク、大聖孔子も、**行に余力ある時はもつて文をまなべ**とこそそのたまひけれ。

『可笑記』は、学問を「人間において極無上の物」と認める一方で、侍があまりに学問に熱中すると不奉公になり、武士道も少し「にかた」即ち劣っているように思われてしまうと警告する。そして、『論語』の「行有カウアルトホ二余力ヨリヨク」、則以学モツマナフレ文ブ（注）を引き、学問は、各人の務めに余裕があるときに行うものであると説く。『可笑記』は、侍が学問をする際、「行に余力ある時」に行うことを条件として呈示しているのである。

これについて『可笑記評判』卷六一七は、次のように批評する。

学文を侍がこめば不奉公になる事、さも有べし。行に余力ある時は文をまなふべき事は、まことにしかなり。学文すらん、心得がたし。学文の心ざしある人こそ、忠孝の道もよくつとめ、義をまもる事もよくその理にかなふべけれ。不学文盲の人は、どこぞ爪はづれのあはぬ事あるもの也。

『可笑記評判』が是と判断するのは、侍が学問を好むと不奉公になり得るということと、だからこそ学問は余力で行わなければならぬということの二点であり、非とするのは、学問をする侍は武士道が劣つていよう思われるという点である。『可笑記評判』は、侍が不奉公になるほど学問に打ち込むのはよくないが、学問を志すこと自体は好ましいと述べているのである。『可笑記評判』の学問観は、『可笑記』のそれと完全に重なるわけではないが、ここではひとまず、『可笑記』と『可笑記評判』が、学問は余力で行うという考え方で通じていることを確認しておく。

ところで、了意は、『可笑記』が引用した『論語』の金言を「まことにしかなり」と評価しているが、実は、評価するだけではなく、『可笑記評判』卷一十五・卷四一・卷四十七では、自らも引用を行っている。このことは、「行有カウアルトホ二余力ヨリヨク」、則以学モツマナフレ文ブという考えが、了意の学問観に重要な意味を持つていることの表れ

だと思われる。では、『論語』の一節は、どのような文脈で『可笑記』批評に取り入れられているのだろうか。右にあげた三段のうち、『可笑記評判』巻二―十五は、学問以外の文事を扱った話であるため、考察は後節で行うことにし、以下に、『可笑記評判』巻四―一・巻四―十七を掲げる。

まず、『可笑記評判』巻四―十七から見てみよう。批評の対象となった『可笑記』巻二―四十一は、武芸の鍛錬は親の言い付けに従ってよく励むが、学問については「廿に及て仕るべし」と言つて励もうとしない子どもに、親が腹を立ててその理由を問い詰めたところ、子どもが、

学問の事は、先此武芸共をならひ覚えて、がつても参るべき年比よりもとづき申べし。

と語つたという話である。武芸と学問に関する親子のやりとりを託して、武芸は学問に先立つという教えが説かれていてと解釈できる。これに対して『可笑記評判』巻四―十七は次のような批評を加える。

武芸を習ひてのち、学問すべしといふ事、もつともよし。〔行〕

余力ある時は、文をまなべとかや。論語にあり。行とは、をのれ／＼の身のふるまひなり。それに手透あらば、文学をいたせ、と也。

『可笑記評判』は、学問は武芸を習つてから行うのがよいとする『可

笑記』に対し、「もつともよし」との評価を下す。「行有<sup>カウレルキホ</sup>二余力<sup>ヨリコク</sup>一、則以<sup>モトメテ</sup>学<sup>ガク</sup>レ文<sup>ブ</sup>」の一文は、評価の理由としてあげられているのである。ところが、了意は、『可笑記』に賛同する根拠を示すただけに『論語』を引用しているのではない。「をのれ／＼の身のふるまひ」に「手透あらば、文学をいたせ」というのが『論語』の教えであると説明しているのである。『可笑記評判』巻四―十七では、余力学問を勧める意図で、『論語』の引用を行っていると考えられよう。

次に、『可笑記評判』巻四―一を見てみよう。巻四―一では、常に怠りなく学問に励むことを説いた『可笑記』巻二―二十五を端緒に、学問に対する了意の持論が展開されている。了意は、書籍を読むことに尽力せずとも、学問の心得がある人に近付いて奉公の合間に教えを請い、自らもよく思案をすれば「をのづから道にいたる」と述べている。忠義を尽くしての奉公を全うし、なおかつ力も時間も費やさず、心を悩ませることもなく学問を行う方法が示されている。そして、そのような方法で侍が学問を行う意義を、件の『論語』の金言を用いることで、以下のように明らかにしている。

孔子のたまはく、〔行〕に余力あるときは、もつて文をまなべと

いへり。忠と孝とは、道の本なり。親に孝あり、君に忠あり。これをおこなふを人たる道とす。その間の隙には、文学をも心がけよ。文学もなを、人たる道をしらしめんがためなり、といへり。(中略)学文といふは、天理本源の性をさとり、あきら

めん為なり。其性とは、五常の道なり。よく此理にいたりぬれば、をのづから徳たかく、行跡みだりならず、忠孝の心ざしたゆまず、軍陣の場にのぞみても、天命をしるが故に、武勇にして未練ならず、死すべき時を退ぞかず、本心みだれず、最後たゞしく名をのこすこと、猶、子路が衛に死せしがごとくならん。

右の批評では、傍線部①において、先掲の『可笑記評判』巻四十七よりもさらに詳しい『論語』の解釈が行われている。忠義と孝行を行うことが「人たる道」であるが、その行いの合間に学問を心がければ、これもまた「人たる道」を知ることに通じていく。だから、孔子は「行に余力あるときは、もつて文をまなべ」とおっしゃったのである。そして、学問によって「天理本源の性」を会得した侍は、傍線部②にあるとおり、忠孝を行う気持ちがあるむことなく、戦の場においても、武士のしかるべき態度をとって名声を残すことができるとして、侍が学問を行う意義を述べている。了意は、学問をあくまで侍の本分を果たすためのものと規定する。しかし、学問はそのような目的を持つものだからこそ、侍にとって有用なのだと主張しているのである。

『可笑記』と『可笑記評判』は、ともに武士の本分とは何かを第一に考える。そのため、「行有<sup>カウテトキハ</sup>二余力<sup>ヨリカ</sup>一、則以<sup>モツテ</sup>学<sup>マナ</sup>レ文<sup>ヲ</sup>」に基づき、侍が行う学問に、余力で行わなければならないという絶対的な条件

を付けるのである。両書の学問に対する意識は、根本的には同じである。違いがあるとすれば、『可笑記評判』が、忠義を心得る助けとして肯定的な意味合いで余力学問を勧めているのに対し、『可笑記』は、侍が学問を好んで行うことを否定的に見て余力学問を唱えているということである。

#### 四

前節では文道を学問のこととして限定的に扱ったが、ここからは、考察の範囲を学問よりもさらに広げ、文道の「文」とは何を指すのかという問いを含みつつ、両者の相違点を見ていきたい。

そこで、『可笑記』巻三十三とその批評『可笑記評判』巻六一七との比較検討を行う。これらは、前節の学問についての考察で取り上げたへ過ぎたるは及ばざるがごとしを主題とする話とその批評である。先述のとおり、手跡・馬・詩歌・鷹狩りといった芸能と学問を扱った話であるが、ここでは文事である手跡と詩歌の条を考察の対象とする。次に掲げる【表一】は、手跡と詩歌の条を抜粋したものである。【表一】では、上段に『可笑記』を、下段に『可笑記評判』を配し、右から①に手跡の条、②に詩歌の条を置いた。

<p>①</p> <p>『可笑記』卷三十三十二</p>	<p>手跡は諸芸万能のうはもりとして、十能七芸にもすぐれたりといへども、侍のあまりに物かきだてもよしなし。もろこしに王義之といへる人は、さばかりの大賢人にておはしけれども、古今にすぐれたる手かきゆへに、義之が筆画石に入事三分と申ならはして、その賢人君子なる事をば、たれ人もとりざた仕らず。さらば、物をも書まじきとて、無筆に候はゞ、おつし・もんもくにて、人間の諸用かなはず。</p>	<p>『可笑記評判』卷六―七</p>	<p>手跡の事、王義之は、手跡によりて名をえたり。賢人君子なりといふも、筆画のほまれ有ける故なり。惣じて、物の上手になるといふは、いづれにてもわがこのまざれば、その道の妙にはいたらざといへり。義之が德行、さこそ有つらめ。手跡が義之が身に第一の事にて有ける成べし。(中略)今もつて、侍の手跡よきが、武勇のほまれの害にならん事、知がたし。</p>
<p>②</p>	<p>詩連句なども、あまりにすぎ好みてよくつくり候へば、済家の出家がへりのやうに思ひあなどる。又、哥れんがなども、あまりすぎこのみてよくよみ候へば、公家のなりさがりかたやはらかに思ひなし、ほむるやうなれども、武士道</p>	<p>詩連句の事、よく作意をはたらかすとして誰か済家僧のはて也と思ふべき。たとひ、又出家おちなればとて、武勇あらばいかゞせん。(中略)哥連歌の事、よく作意あるを公家の成さがりとは又誰か思はん。いかでか武士道にかた也</p>	

にかたに思ひあなどる。さらば、詩連句・哥連哥をもらざる事とて心得ねば、底意つたなく万事に心うつらず。されば、ふうん流水にも心うつりて面白きは、詩連句・歌連哥の道なるをや。誠人輪おほしといへども、公家武家と号して此道をまもり学するいにしへの武篇ほまれ侍、いづれか詩哥を心得ざる。

とあなどらんや。ことに詩哥は文の道なり。それ、みだれたる時には武をもつてしづめ、おさまれる世には文をもつて世にほどこす。文武二道は天地の経緯なり。いづれをかすてもちひざらんや。此書にいふところ、武篇ほまれの侍、秀逸の詩哥をつくりし、つゝに済家のおちたるとも公家のさがりたるとも申たる事なし。詩は済家、哥は公家と其家にかぎると思へるは、せばき事也。

まず、①手跡の条から見てみよう。『可笑記』は、傍線部で、侍にとつて手跡をたしなむことは大切な文事と認めているものの、あまりに達筆であることを「よしなし」とする。そう考える理由として、王義之の話の例に出す。王義之は、大賢人であるにも拘わらず、能筆であったがために、書以外のことについては妥当な評価が得られなかったのだという。それに対して『可笑記評判』は、傍線部で、手跡に限らず何かに長けるといふことは、自分が好んで行つて初めてその境地に至るのだと批評し、王義之もその例外ではないとする。

①からわかることは、第一に、『可笑記』も『可笑記評判』も手跡を侍に必要な文事と捉えていることである。そして、第二には、『可笑記評判』は、何事も好んで行わなければ上手にはならないという考えを持っていることである。

次に、②詩歌の条について比較を行う。『可笑記』は、傍線部にあるように、侍が詩歌を好み過ぎて上手に詠むと、武士道が劣っているように侮られてしまうと懸念する。対する『可笑記評判』は、上手に詩歌を詠む侍について、傍線部にあるように、どうして武士道が劣っていると侮られることがあるのか、と反論を行う。そして、その論拠として、詩歌が、文武二道のうち、太平の世に必要とされる「文の道」に相当することを述べている。

ここで想起されるのは、了意が今の時代を太平の世だと明確に認識していたということである。『可笑記』批評の焦点は、『可笑記』の提示する文武の教訓が、平和な今の世に適っているか否かなのであった。このことを考慮すると、右の批評は、「文の道」である詩歌が、今の世に必要なことを説くものだと考えられよう。平和な時代では、詩歌は侍がたしなんでしかるべき文事なのである。『可笑記』と『可笑記評判』の詩歌に対する意識の違いは、時代を眺める視点の有無に起因すると言える。

以上、①と②から、『可笑記』と『可笑記評判』の意識の違いが見えてくる。『可笑記』は、侍が手跡・詩歌を好んで上手になるこ

とを悲観的に見ているが、『可笑記評判』は、好んで上手になることは「その道の妙」に至ると考え、好意的に見ている。また、『可笑記評判』は、今という時代を認識しているだけに、文事を積極的に取り入れようとしているのである。了意のこの意識は、『可笑記評判』巻六―七で、手跡・馬・詩歌・鷹狩りといった芸能と学問をそれぞれ批評し終えた後に述べられている総評にも表れている。

さて、右のしな／＼、よきほどに上つらばかりを心得わたし  
てうちをかば、首刈学文とかや、いづれの道もその理をきはめ  
ず、名もなくほまれもなく成ゆくべし。武道をたしなむとて  
も、天下太平の世なれば、武勇者の名もあらはるまじ。其中  
に、女がた、酒、盤上などはこのみておちいり、徳をうしなふ  
事に成やすし。

手跡・詩歌・学問の上辺を理解しただけでは、理を極めることはできず、名譽も得られない。また、武道をたしなむと言っても、今は天下太平の世なので、武勇で名は残せない。そういうしているうちに、気持ちは女形・酒・盤上の方に傾き、徳を失うことになりやすい。このような考えから、了意は、侍に対し、余力があるならば、手跡・詩歌・学問といった文事を好んで行うように勧めているのであろう。太平の世において、学問などの文事を身につけておく必要性は、戦乱の世とは比べようもないほど高いのである。

五

ここまで、『可笑記』と『可笑記評判』の学問・手跡・詩歌に対する意識を見てきたが、『可笑記評判』にはあとひとつ、文事に関わる話で、検討を加える必要があるものが存在する。それは、学問以外の話の中で「行有<sup>カウアルキキ</sup>ニ余力<sup>ヨリヨク</sup>」、則以<sup>モソビテ</sup>学<sup>マナブ</sup>レ文<sup>ブ</sup>」を引用した『可笑記評判』巻二十一十五である。批評の対象となった『可笑記』巻一四十三は、数寄と不数寄の小身なる侍二人が数寄について口論するという話である。しかし、話の大部分は、不数寄者による数寄批判で占められており、当話の目的は、名利を貪りやすい数寄者への批判と、数寄がいかに侍の職務の障害となるかを説くことであると考えられる。

『可笑記』の数寄批判に対して、『可笑記評判』はどのような批評を行い、『論語』の一節を引いたのであろうか。『可笑記』巻一四十三と『可笑記評判』巻二十一十五を比較するために、両者の違いが顕著な部分を抜粋し、『表2』とした。上段に『可笑記』を、下段に『可笑記評判』を配置している。双方の本文は、便宜上、私の判断によって内容ごとに区切り、右から①②③④と番号を振った。

【表2】

①	『可笑記』巻一四十三
いにしへ、かしこき人の茶をもてあそばれしは、有にまかする草のみしろ、落葉の薪、しばのあみ戸のあけくれに、本心をこそやしなひたれ。今のすきしやの茶をたつるは、宝くらべをもつはらとして、名利にはしり、邪悪にとままり、本心をにこし、くらます。	『可笑記評判』巻二十一十五 古しへの賢人、あるにまかせて茶をもてあそびし事は、これ、風顛の道人の事をいへり。もし、又、豊饒の人は、うつは物をもえらび、名物をも求めて、もてあそび給ふべし。心をたのしみ、なぐさむる事、大名高家貴人のうへに又よき事也。
②	『可笑記評判』巻二十一十五
さぶらひとして、すきやの、せばき所へをしこめられ、刀わきざし、てどをにすてをき、なんの心やすき事ありておもしろがり、うれしがるぞや。侍道油断の大てき、これに過べからず。	刀わきざし、手どをにをく事、まことに武士のをこたり也といへども、(中略)この人は、風呂にも、刀をさしけるや。帯ときて湯あぶるも無用心なるべし。又、しるていはゞ、此詞は、只、これ一夫の勇なり。大名高家は、人数あまたもち給ふ。茶の湯のあひだにおこる大事は、その人数にてふせぐべし。(中略)茶は、これ、太平清心のもてあそびものなり。乱を思ふ者の心にあらず。

<p>③</p> <p>日比すきなる故に、第一は不奉公にして主君恩を報ぜず、当世置の上の奉公は、戦場と同事ならずや。其上、すきな故に益なき道具をかひもとめ、無用の金銀をつくすに、手前ひつぱくして奉公のつとめ成がたく、侍が道具しやうぞくみぐるしければ、人前のたちふるまひなりがたく、見にくし。</p>	<p>④</p> <p>日比したくの弓、鏑、てつばうまでも、貧苦にせめられ、うりすて、しちもつにをき、茶ばかりをたてならひ、あすにも事すでに出来たらば、何をもつて武法をと、のへ、佳名をあらはし、主恩をほうぜんや。但、其時にあたつても、ちやがまが甲になるべきか、ひしやくがさし物になるべきか。侍のすきすく事、ついへ、あほう言語にいとまあさあらず。</p>
<p>小身なる人、主君に不奉公をいたし、馬具、装束見ぐるしく、郎徒をめぐまず、身上逼迫して、茶の湯を出さん事はしかるべからず。それ、只、あるにまかする茶の湯こそ、心をたのしむ道ならめや。</p>	<p>武の法をわすれて、大事に望む時、物の用にたつべからずといふ事、釜を甲にも、柄杓をさし物にも成べからず。されば、物みな、その役にあたる品々あり。(中略)その役用をいふとき、陣中に釜なき時は、甲にて飯をたくべきや。水をのまんとする時、さし物にてくむべきや。それ、おさまれる世のもてあそび、みだれたる時の兵具、これ、すでに各別也。</p>

さて、【表2】に基づいて検討を行う前に、『可笑記評判』が『可笑記』の話の枠組みについて批評している部分を抜き出す。

この一段、小身なる人の数奇をいましめたるや。又、大身にも通するや。一段の始終聞えがたし。もし、小身成人の数奇をいましむるには、墨跡、茶碗等の事はいふにたらず。又、大身に通ずといはんとすれば、文章の始終は、小知行の侍の相論なり。いづれともかたづきがたき寓言なり。

了意は、『可笑記』の批判する数奇者が小身なのか大身なのかを問題としている。なぜならば、茶の湯を好むのが小身か大身かによって、数奇批判の是非が大きく変ってくるためである。①を見てみよう。『可笑記』は、今の数奇者は宝比べに専心して利欲に走るとして、数奇者の批判を行っている。それに対して、『可笑記評判』は、豊かな人は器物を選び、名物を求めて遊びなさるのがよいと言って反論している。大名・高家・貴人の場合は、「心をたのしみ、なぐさむる」ために、高価な茶道用具を買い集めても構わないと述べているのである。逆に、③のように、『可笑記』の批判する対象が小身である場合は、『可笑記評判』も、『可笑記』と同じように、身上を崩してまで茶の湯をしてはならないと述べており、「あるにまかする茶の湯こそ、心をたのしむ道ならめや」という教訓を行っている。①③の『可笑記評判』からは、了意が、茶の湯を「心をたのしみ、なぐさむる」ためのもの、「心をたのしむ道」と考えている

ということが窺えるのである。

では、そもそも、侍が茶の湯をたしなむこと自体について、『可笑記』と『可笑記評判』は、どのような考えを持つているのか。②の『可笑記』では、油断大敵であるはずの侍が、狭い数寄屋に入るために丸腰となるのは、油断そのものであると批判している。これに対して『可笑記評判』は、侍が刀や脇差しを手の届かない所に置くのは「武士のをこたりに違いないと認めながらも、茶は「太平清心のもてあそびものなり。乱を思ふ者の心にあらず」として、『可笑記』の数寄批判を斥けている。また、④の『可笑記』は、兵具を質屋に入れて茶道具を買い揃えていても、有事の際に、茶釜が甲となるわけでもなく、柄杓が指物となるわけでもないと言つて非難している。対して『可笑記評判』は、道具にはそれぞれの「役用」があるのだから、茶道具が兵具の代用にならないのは当然だとする。そして、「おさまれる世のもてあそび、みだれたる時の兵具、これ、すでに各別なり」と述べている。このように、『可笑記評判』では、数寄道を「太平清心のもてあそび」「おさまれる世のもてあそび」と見なし、軍事的なものとは完全に切り離して考えているのである。

『可笑記評判』は、数寄道を完全に否定する『可笑記』とは大きく異なり、太平の世に、余力ある人々が心を楽しむ文道として、数寄道を捉えている。そして、批評の結びの部分において、『論語』

を引用しているのである。

但、行、余力あるときは文をまなぶといへり。武道おろそかに、侍の法みだりにして、茶の湯におちいる者は、これ不覚人也。わがおこなふ道をよくつとめ、その職をよくおさめてのち、茶の湯もこのむべし。

「行有<sup>カテルキハ、ヨリカク</sup>二余力<sup>モリカク</sup>一、則以<sup>モリマナブ</sup>学<sup>ブ</sup>レ文<sup>ヲ</sup>」を踏まえ、「わがおこなふ道をよくつとめ、その職をよくおさめてのち、茶の湯もこのむべし」という但し書きとなつている。「行」が武道であることは言うまでもないが、「文」に相当するのはここでは茶の湯である。了意は、余力で行う茶の湯を文事と見なしているらしいのである。

では、茶の湯は、諸芸の中でどのように位置づけられているのか見ておこう。『可笑記』巻二十四には次のようにある。

むかし、さる人の云るは、侍の花車なると云は、行儀よく、正じきにして人にくみせしらず、へつらはず、身に相應の奉公を大事とつとめ、そのひま／＼には、仏道、儒道、詩歌のみちに心ざし、弓馬、しつげがた、兵法、手跡など、少づ、も心得たるぞめでたくおほゆ。

茶をたて、花をいけ、詞のなまりをわらひあざげり、すがた、しやうぞくをつくろひ、物にもた、ぬ物ずき、やはらかなる風情をきやしやおもへる事、お上がた衆の意地也。

風流に身を委ねる侍とは、分相應の奉公をおろそかにせず、その

合間に、仏道・儒道・詩歌・弓馬・礼儀作法・兵法・手跡などをたしなむ人のことであるという。ここでは、風流な侍となるためにたしなむことが望ましいものとして、仏道・儒道に並び、詩歌・手跡があがっている。ところが、茶の湯は、侍ではなく上方者が行う風流だとなっており、詩歌などとは一線を画しているのである。茶の湯や生花を親しむ侍には、厳しい目が向けられていたことがわかるであろう。

対する『可笑記評判』巻四―二十は、以下のとおりである。

詩歌、手跡、花、茶など、めん／＼このむ所あり。おなじく芸能のうち也。余りにこのみ過しては、禍の種となる也。これらの事、さのみにしらずとも又くるしからず。

『可笑記』が、茶や花を詩歌や手跡とは完全に区別しているのに対し、『可笑記評判』は、それらを同列に扱っている。『可笑記評判』では、茶の湯や生花も、詩歌や手跡と同様、侍が行う文事として扱われているのである。

『可笑記』は、侍の数寄道に反対する。手跡や詩歌とは違い、文道であるとは考えていないのである。一方、『可笑記評判』は、数寄道も侍が行う文道のひとつに数えている。平和な時代に生きる侍、特に余裕のある侍にとって、心を楽しませるために行う茶の湯は、決して不要なものではないと考えるのである。『可笑記』と『可笑記評判』における文事についての決定的な違いは、数寄道におい

て最も顕著に表れていると言えよう。

## 六

以上、『可笑記評判』の序文に示された「すべて文武二道の表裏本末、みなその時代によるべきことなり」という言に立脚して、『可笑記』と『可笑記評判』の文武観を比較することにより、『可笑記評判』の批判の内実について考察を行ってきた。

『可笑記評判』の文武観は、家職励行を重んじるという意味では『可笑記』と考えを一にする。しかし、『可笑記評判』が『可笑記』と大きく異なるのは、時代を眺める視点を持っていたことである。了意は、今の時代というものを見定めることによって、『可笑記』よりも侍にとっての文事の必要性を強く感じ、『可笑記』の唱える文武観に異を唱えたのである。平和な時代において、武士はどのようになれば文武を正しく実践できるのか。その問いの答えとして、了意は、学問や詩歌のみならず、茶の湯までも文道の領域に入れ、奨励を行った。世は今や、武士が武道を全うするために、余力で行う文事こそが必要となる時代である。そう了意は確信し、『可笑記』を批評したと考えられるのである。

(注1) 『可笑記評判』は寛永十四年の跋文を持つが、批評の対象である『可笑記』が、寛永十三年成立の後に加筆を経て寛永十九年に刊行され

しており、さらに『可笑記評判』の引用する『可笑記』の本文が無刊記本(寛永十九年以後刊と推定。注2参照)であるため、跋文をもつて成立時期を定めることはできない。野間光辰氏は「了意追跡」(『近世作家伝攷』一九八五年十一月 中央公論社、初出『改訂浅井了意』北条秀雄編 一九七二年三月 笠間書院)で、了意は寛永十四年に『可笑記』の草稿本を内覧して『可笑記評判』を執筆し、刊行に際して改めて推敲改削を行ったと推量している。また、北条秀雄氏は「新修浅井了意」(一九七四年 笠間書院)で、本文中に、寛永十九年の飢饉の記事、正保四年刊『梅草』の記事、万治二年刊『堪忍記』の記事があることから、寛永十四年に起稿、万治二年頃まで書き継がれたと推測する。『仮名草子集成』第十六卷所収『可笑記評判』解題(朝倉治彦・深沢秋男編・解題執筆 一九九五年 東京堂出版)によると、諸本には、早印本と後印本とがある。なお、本稿で用いる『可笑記評判』の本文は、近世文学資料類従・仮名草子編21・23『可笑記評判』(万治三年板の影印 一九七七年 勉誠社)を翻刻したものである。引用に際しては、振り仮名を省略し、適宜、濁点・句読点を補い、私に段落・記号・傍線を設けた。又、漢字は通行の字体に統一した。

(注2) 寛永十三年の跋文を持つが、本文中に寛永十五年に起こった鳥原の乱の記事が見られることから、寛永十三年成立後も加筆されたと推測される。諸本には、寛永十九年十一行本、同年十二行本、無刊記十二行本、万治二年絵入板本がある。このうち『可笑記評判』に引用された無刊記本は、『仮名草子集成』第十四卷所収『可笑記』解題(朝倉治彦・深沢秋男編・解題執筆 一九九三年 東京堂出版)で、他の諸本との本文異同から、寛永十九年以後、万治二年以前の刊行と推定されている。なお、本稿で用いる『可笑記』本文は、『可笑記

大成』影印・校異・研究」(一九七四年 笠間書院)所収の寛永十九年十一行本の影印を翻刻したものである。引用方針は、(注1)『可笑記評判』に同じ。

(注3) 『浮世物語』の挫折―仮名草子における批判的リアリズム―(『日本近世文学の成立』一九七二年八月 法政大学出版局、初出『国語国文』第二六卷五号 一九五七年五月)

(注4) 『可笑記評判』の(批判) (『近世における文芸的領域の成立と位相』一九九四年五月 おうふう、初出『国文学研究ノート』第一八号 一九八五年九月)

(注5) 『可笑記評判』について (『日本文学の研究』一九七四年七月 文理書院)

(注6) 『評・注の文学―『可笑記評判』を中心に』(『仮名草子研究―説話とその周辺』二〇〇三年九月 新典社、初出『大妻女子大学文学部三十周年記念論文集』一九九八年三月)

(注7) ただし、『日本古典文学大辞典』(一九八三―八五年 岩波書店)の『可笑記評判』項(田中伸氏執筆)では、「批評内容は殆ど『可笑記』の言説の反駁となっており、昂然たる批評に徹した趣がある」と紹介されている。

(注8) 『可笑記』の考えは、『礼記正文』卷三・学記「玉不<sub>レ</sub>琢<sub>レ</sub>不成<sub>レ</sub>器<sub>レ</sub>、人<sub>不</sub>レ<sub>レ</sub>学<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>」(寛政十年和刻 葛山壽・萩原萬世点、和刻本經書集成)第三輯 長澤規矩也編 一九七六年 汲古書院)によるもので、了意もまた『可笑記評判』巻五―二十四(『可笑記』巻三―二十四の批評)で、「人々身の中に、をのくひとつの玉あり、と云。これ本心をさしていへり。玉みが、ざればひかりなし。そのみがくと云は、学道なり」と、『可笑記』の反復とも言える教訓を著している。

(注9) 『論語』学而第一。引用は『和刻本經書集成』第四輯(長澤規矩也編一九七七年 汲古書院)所収、片仮名旁訓本(江戸初期和刻 訓点者不明)によった。なお、本稿では、『可笑記』と『可笑記評判』の本文で、『行有<sup>カウトキハ</sup>ニ余力<sup>ヨリコゾク</sup>』、則以<sup>モソクニ</sup>学<sup>マナブ</sup>レ文<sup>ブン</sup>』の引用が認められる箇所には、四角囲いを施した。

〔付記〕 本稿は、平成十九年度広島大学国語国文学会研究集会(十一月二十五日)での口頭発表に基づくものです。席上および発表後にご教示下さいました方々に心より御礼申し上げます。

―すえまつ・まさこ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学―